女子大学生の靴の着用実態に関する調査

薩本弥生[1)] 里見彩加[2)] 柳瀬和子[2)]

1: 横浜国立大学教育学部, 2：元横浜国立大学教育人間科学部学部生,

Investigation about the shoes wearing situation for female college students

SATSUMOTO Yayoi, SATOMI Ayaka, YANASE Wako

1: College of education, Yokohama National University
2: Former student on college of education and human sciences, Yokohama National University

１．緒言

日常生活時間中に靴を着用している時間が増加し、靴の履き心地、すなわち快適性が重視されるようになり、履いていて楽な靴、快適な靴の需要が高まりつつある。しかし、最近の厚底靴やミュールなどの流行のように若い女性を中心にデザイン性、ファッション性の高い靴ではなお、歩行性能は軽視されがちである。中でもパンプスは、多くの女性が愛用しているファッションアイテムの一つであり、かつフォーマルな履物としての利用頻度も高い。パンプス着用により、そのみた目の美しさや身長を高くみせること、美脚効果などの様々な要因から通学・通勤や就職活動など、長時間の歩行においてパンプスを着用する人は多い。パンプスは審美性を重視したものが多いため、長時間の着用により疲労感や不具合などを感じる場面が多い。

特に、女性が働くときに履く靴をめぐる議論が巻き起こっている [1)]。一部の職場においては就業規定の中で靴の種類は高さが規定されていて、パンプスの着用強制がされている実態が明らかにされた。女性の性差別であるとか、多くの人が靴ずれ、出血、外反母趾などの健康被害に苦しんでいるとのと報告されている。それに対する抗議運動としてヒールのあるパンプス着用を強いられることに異を唱える「#KuToo（クートゥー）」運動に多くの賛同者が集まるなど、女性を中心に大きな共感を集めている。

そこで本研究では本学の女子学生がパンプスを含め、靴着用時や購入前後に関する靴の履き心地や購入時の重視項目、足に関わる問題等に関する実態を明らかにするため、アンケートを実施し、女子大学生の靴の着用実態を明らかにすることを目的とする。なお、本研究を実施するにあたりインフォームドコンセントを行ってから実施した。

２. 研究方法

2-1 アンケート対象者

パンプス着用時に関するアンケート調査を本学の講義「小教専家庭科」,「衣生活の科学」の受講者を対象に，YNU 授業支援システムを用いて 2017（平成 29）年～2019（平成 31）年の 3 年間に女子大学生対象に実施した。回答者数は 2017 年度 118 人、2018 年度 102 人、2019 年度 107 人の計 327 人であった。

2-2 調査方法

アンケートは 44 項目で, ファッションへの関心度や常用靴に関して, パンプス購入時に重視する項目, パンプス着用時のトラブルなどについて、5 件法(1.そう思わない、2.あまりそう思わない、3.どちらでもない、4.ややそう思う、5.そう思う)で作成した。

2-3 分析方法

解析には、SPSS Statistics25 を使用した。5 件法の回答は、量的に扱える間隔尺度として扱った。質問の回答結果を基礎統計量と回答割合の集計で全体的な傾向を把握した。因子分析を行った。因子分析については、すべて主因子法・プロマックス回転法を用いた。有意水準 $p<.10$、$p<.05$、$p<.01$、$p<.001$ で有意差検定した。

３結果と考察

3-1 ファッション関心度について

Fig.1 に示す通りファッション雑誌を購入したことがあると回答したものが 209 人（67.6%）、購入したことがないと回答したものは 98 人（31.7%）、わからないと回答したものは 2 人（0.6%）であった。

次に、ファッション雑誌を購入したことがあると回答した 350 人に対してファッション雑誌をどのくらいの頻度で購入するかという質問をした結果を Fig.2 に示す。半年に 1 回の頻度で購入すると回答したものが最も多く、69 人（33.3%）であるのに対して、月に 1 回が 39 人（18.8%）でありファッション

雑誌を購入する者の中でもその頻度には個人差があることが分かる。また、購入頻度をその他と回答した者の中には、電子書籍を購入している者や付録目当てで購入する者、自分の好きな有名人が特集されている時のみ購入するといった回答が目立った。また、中学生や高校生の時までは月に 1 度購入していたが現在は購入していないという回答も目立った。

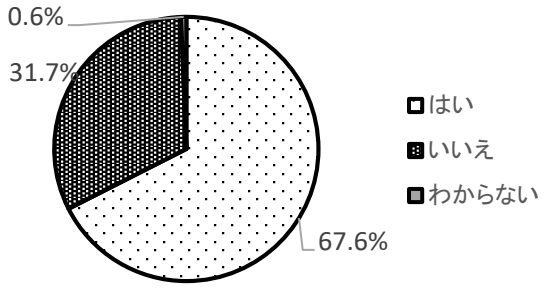

Fig.1 ファッション雑誌購入の有無

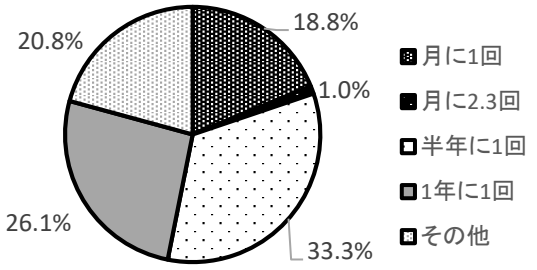

Fig.2 ファッション雑誌購入の頻度

ファッションに関する情報をどこから手に入れているのかという項目に対しては Fig.3 に結果を示す。

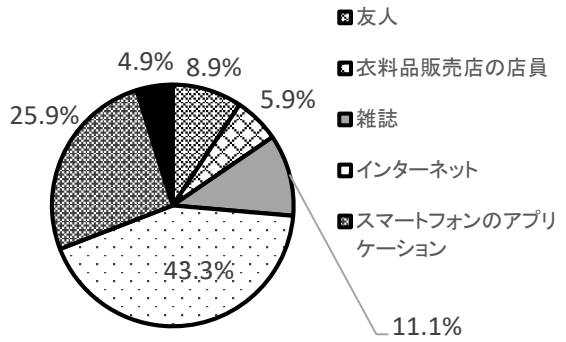

Fig.3 ファッション情報入手源

インターネットからが 132 人（43.3%）、スマートフォンのアプリケーションからが 79 人（25.9%）と電子媒体を介してファッションに関する情報を得ている者が多いという結果になった。便利ですぐ利用できるインターネット等を利用する者が約 69%という結果になった。

3-2 常用靴に関して

普段どのような種類の靴をよく履くかという項目に関して Fig.4 に示す。ヒールがあるパンプスが 21 人（6.4%）、ヒール無しのパンプスが 19 人（5.8%）、サンダル 9 人（2.0%）、スニーカー252 人（77.1%）、革靴 13 人（4.0%）、ブーツ 10 人（3.1%）、その他 3 人（0.9%）と、回答者のほとんどが動きやすいスニーカーを好んで履いているということがわかった。和田坂を登って通学し、学内も起伏が多いキャンパスのためだと推察される。

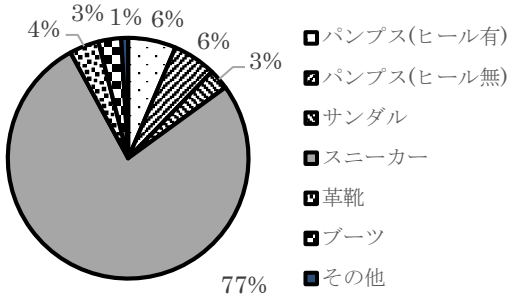

Fig.4　常用靴

3-3 パンプスの着用頻度に関して

パンプスの常用者の中でヒール有・無のパンプスをどのくらいの頻度で履くかの結果を示す。ヒールの有るパンプスを毎日履くと回答した者は Fig.5 に示すように 2 人（0.7%）、週に 5,6 回が 4 人（1.3%）、週に 3,4 回が 30 人（9.9%）、週に 1.2 回が 58 人（19.1%）、週に 1 回未満が 118 人（38.8%）、全く履かないと回答した者が 92 人（30.3%）であった。

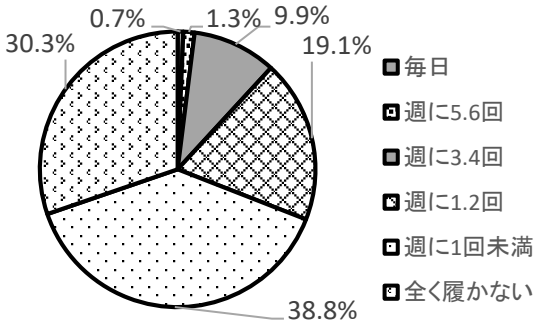

Fig.5 ヒール有りパンプスの着用頻度

ヒール無しのパンプスについては Fig.6 に示すように毎日履く者が 14 人（4.6%）、週に 5.6 回が 12 人（43.9%）、週に 3.4 回が 31 人（10.2%）、週に 1.2 回が 49 人（16.1%）、週に 1 回未満が 60 人（19.7%）、全く履かないと回答した者が 139 人（45.6%）であった。パンプスを履く頻度自体が低いが、ヒールが有りと無しでは、わずかではあるがヒール有りパンプスを履くものの方が多い。

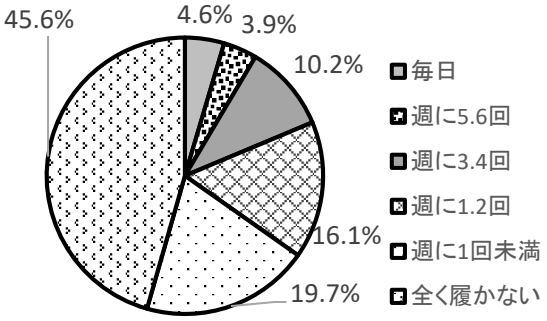

Fig.6 ヒール無しパンプスの着用頻度

3-4 パンプス購入時の試着状況に関して

パンプス購入時の試着状況について Fig.7 に示す。試着を必ずする者が 256 人（84.2%）、する時の方が多い者が 38 人（12.5%）、どちらともいえないと回答した者が 6 人（2.0%）であり、しない時の方が多いと回答した者は 4 人（1.3%）で試着の習慣がある人が多かった。

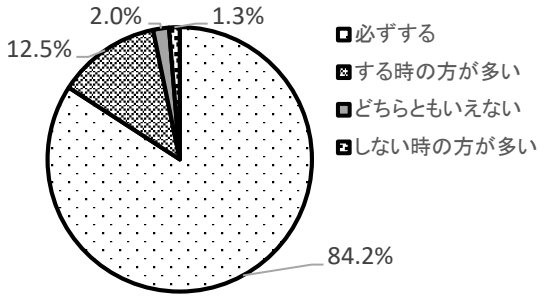

Fig.7　パンプス購入時の試着状況

3-5 パンプスのヒールの高さに関して

Fig.8 に最もよく購入するパンプスのヒールの高さの結果を示す。

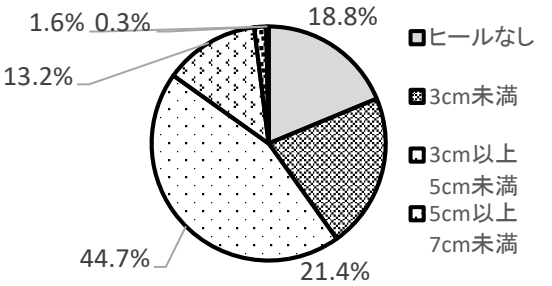

Fig.8 最もよく購入するヒールの高さ

ヒール無しパンプスをよく購入する者が 57 人（18.8%）であるのに対して、3cm 以上 5cm 未満のヒール有りパンプスを選ぶものが 136 人（44.7%）と最も多く、次いで 3cm 未満のヒールがついているパンプスを選ぶものが 65 人（21.4%）と多く、ヒールがない靴よりもヒールがある靴を選ぶことが分かった。また、ヒールがある靴を選ぶ際には、3cm 以上 5cm 未満のヒールの高さが最も好まれるということが分かった。

3-6 足に関するトラブルに関して

現在の自分の足に関して問題点の有無と問題の種類について Fig.9 に示す。問題がないと回答した者が 117 人（38.5%）と最も多かった。しかし問題があると自覚している者の中ではその問題の種類で靴擦れ 63 人（20.7%）が目立ち、足に何らかの問題があると回答した者は全体の半数近くであった。その他の回答で多かったのが扁平足である。足囲に対して合うサイズがないといった回答であった。日本人口の約 50%に足病変を認めるという結果[2]と比較すると今回の調査でも同様の結果が得られた。米山ら[3]によると、足の症状および足病変に関連する因子をみてみると、ミュールやパンプスなどの幅の狭い履物やヒールの高さが関連していることが示唆された。パンプスなどファッション性の高い靴は、足をスマートにみせるように前足部がすぼまっており、狭くなっている、これは現代の纏足ともいえ、足を障害する靴になっていることが足型と靴型の比較からも明らかである。このようにパンプスやサンダル・ミュールなどは、足への負担が多く、女性に足病変や症状を訴える者が多い原因のひとつであると考えられる。

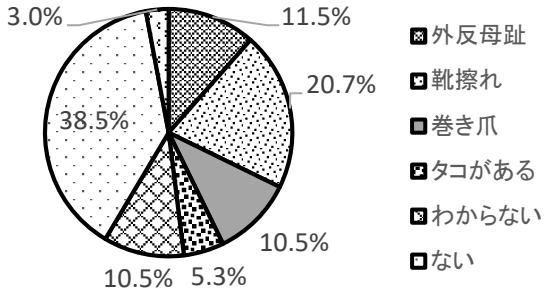

Fig.9 足に関するトラブルに関して

3-7 パンプス着用に関わる回答の因子分析結果

5 件法で回答を求めた 21 項目に対して因子分析を行った結果、4 因子（固有値 1.0 以上）を得た。結果と因子負荷量を Table1 に示す。

Table1　パンプスに関する因子分析結果

	I	II	III	IV	命名
パンプス着用時のサイズ適合性	.818	.003	.217	.045	パンプストラブル因子
パンプス着用時の足長の適合性	.779	−.020	.089	.023	
パンプス着用時の足幅の適合性	.672	−.008	.096	.038	
パンプス着用時の歩きにくさ	.661	.145	.126	−.005	
長時間歩行で問題点あるか	.440	.156	.204	.154	
パンプス着用時につまずくか	.404	.101	.327	−.092	
パンプス着用時の蒸れの有無	.362	.295	.125	.013	
歩き難くても履き続けるか	.065	.760	−.066	−.029	機能否定ファッション観
歩き難くてもヒールを履くか	.022	.693	−.134	.041	
デザイン重視度	.004	.547	.260	.021	
ブランド重視度	−.040	.355	−.128	.144	
サイズの適合性重視度	-.018	.019	.992	.071	靴適合性重視
サイズ重視度	.033	-.040	.921	.000	
購入時の試着状況	.157	.029	.828	-.083	
ヒールの高さ重視度	-.132	.044	.525	.259	
蒸れにくさ重視度	.271	-.113	-.098	.823	快適性重視
肌触り重視度	−.017	.070	.028	.608	
歩きやすさ重視度	-.011	-.090	.173	.642	
ヒールの安定さ重視度	-.341	.119	.090	.540	

第1因子は「パンプス着用時のサイズ適合性」「パンプス着用時の足長の適合性」「パンプス着用時の足幅の適合性」などからなっているので、パンプスサイズ適合性重視度が高いが、「パンプス着用時の歩きにくさ」「パンプス着用時につまずくか」など問題点に関わる要素が含まれるため「パンプストラブル因子」と命名した。次の第2因子は「多少歩きにくくてもデザインが気に入れば履き続ける」「多少歩きにくくてもヒールを履く」「ブランド重視度」「デザイン重視度」「サイズの適合性重視度」からなるので「**機能性否定ファッション観**因子」とする。第3因子は「サイズの適合性重視度」「サイズ重視度」「ヒールの高さ重視度」「購入時の試着状況」の4項目からなるので「靴サイズ適合性重視因子」とする。最後の第4因子は「蒸れにくさ」「肌触り重視度」「歩きやすさ重視度」「ヒールの安定さ重視度」の4項目からなるので「快適性重視因子」とそれぞれ命名した。

次に、最もよく購入するヒールの高さ（以下ヒールの高さ）を従属変数、その他の変数を独立変数とする重回帰分析を行った。結果を Fig.10 と Table2 に示す。ファッション性重視度因子からヒールの高さへの標準化回帰係数は 0.40、有意確率 0.1%で有意であった。ヒールの高さに対する影響度が大きいのはファッション性重視因子であるといえる。

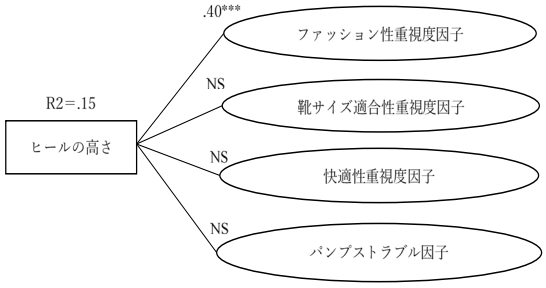

Fig10 ヒールの高さに対する各因子の重回帰分析
(*** : p<.001)

Table2　重回帰分析結果の標準化係数 β と有意確率
(***: p<0.001)

因子	標準化係数 β	有意確率
パンプストラブル因子	0.02	0.777
ファッション性重視度因子	0.40***	0.000
靴適合性重視度因子	0.06	0.306
快適性重視度因子	−0.02	0.768

Fig.11 にパンプス着用頻度でパンプス常用者とパンプス非常用者の2群に分け、ヒールの高さとファッション性重視度（因子が高いほど重視になるように軸を逆転）の箱ひげ図を示した。括弧の中のバーが中央値を示す。

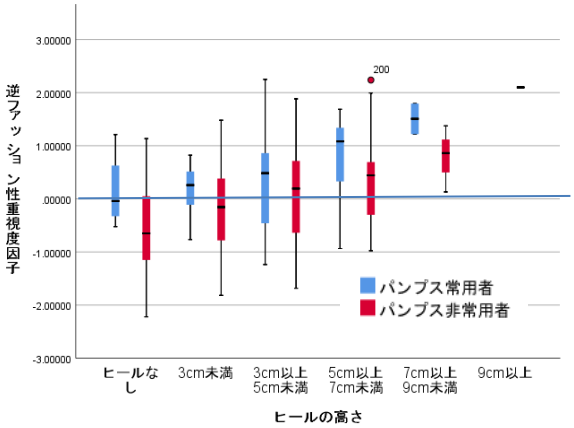

Fig.11　ヒールの高さとファッション関心度

パンプス常用者はパンプス非常用者と比べ、ヒールの高さ毎に中央値で比較するとファッション性重視度が高い。また、パンプス常用者ではヒールの高さが高いほどファッション性重視度が高くなっている。非常用者でも傾向は同様であるが、全体に低く、「ヒール無し」あるいはヒール3cm未満の該当者は2群ともファッション性重視度は負の値になっており、ファッション重視でないことがわかる。

次に因子得点を用いて各因子間で相関分析を行った。結果を Table3 に示す。

Table3　因子間相関分析結果

	靴サイズ適合性重視	快適性重視	機能性否定ファッション観
パンプストラブル	-0.35**	0.23	0.03
靴サイズ適合性重視	1	0.38*	-0.53**
快適性重視		1	-0.49**

*: $P<0.05$,　**: $P<0.01$,

機能性否定ファッション観因子と靴サイズ適合性重視因子、快適性重視因子間に有意に負の相関が認められた。サイズが合わない、歩きにくいとかの快適性やサイズの適合に課題があってもデザインが気に入ればパンプスを履き続けてしまっている傾向があることを示す。以上の因子間相関の関係からパス図にして各因子の関係性を Fig.12 に示す。

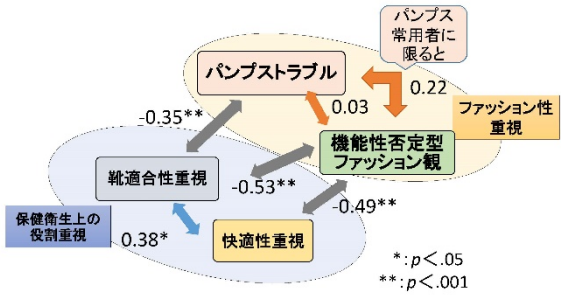

Fig.12 因子間相関のパス図

快適性重視と靴サイズ適合性重視は正の相関があり同じ群に含まれると考えられる。それらを保健衛生上の役割重視因子とした。パンプストラブルは靴適合性重視と負の相関があり、機能否定型ファッション観は靴適合性重視とも快適性重視とも高い負の相関があり、それらは同じ群としてファッション性重視因子と考えられる。パンプストラブルと機能性否定型ファッション観は全体では相関がなかったが、パンプス常用者に限ると有意とはならなかったが係数は大きくなった。

3-8 パンプス着用時の意識に関して

パンプス着用時の意識に関する質問をしたところ、パンプス着用時に歩きにくいと感じるかという項目に対しては Fig.13 に示す通り、とても感じる 62 人（20.4%）、やや感じる 141 人（46.4%）と回答者の半数以上がパンプスを履いた時は歩きにくく感じるという回答をした。また、パンプス着用時に歩きにくくてもデザインが気に入れば履き続けるかという項目に対しては、Fig.14 に示すようにデザインが気に入れば履くと回答した者はとてもそうである 28 人（9.2%）、ややそうである 117 人（38.5%）と半数近い回答を得た。とてもそうである 14 人（8.8%），ややそうである 71 人（44.7%）と半数を超えた。歩きにくいという自覚があるにも関わらずデザイン性の高いパンプスを履き続けてしまっているという現状であることが分かる。

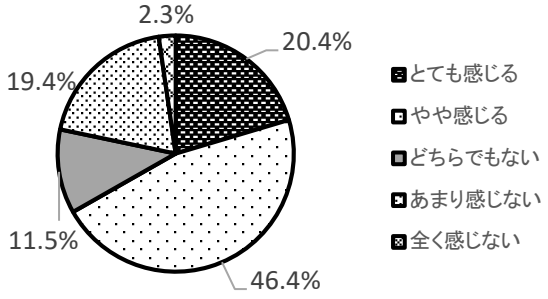

Fig.13 パンプス着用時に歩きにくいと感じるか

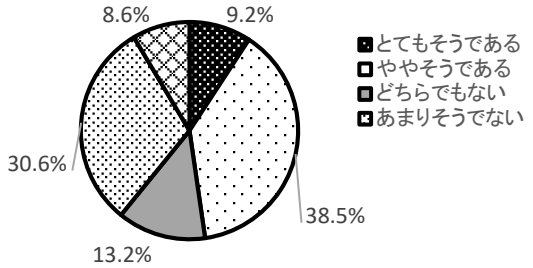

Fig.14 パンプス着用時に多少歩きにくくてもデザインが気に入れば履き続けるか

4 結論

本学の女子学生がパンプスを含め、靴着用時や購入前後に関する靴の履き心地や購入時の重視項目、足に関わる問題等に関する実態を明らかにするため、アンケートを実施した。以下に示す。

1）約 7 割の者がファッション雑誌を購入したことがあるが、定期的に購入している者は約 2 割しかいない。ファッションに関する情報は 7 割以上の者がインターネットやスマートフォン経由で得ている。

2）パンプスを普段から好んでよく履いている者は約 1 割であり、回答者の約 8 割が歩きやすく動きやすいスニーカーを好んで履いている実態が明らかとなった。

3）パンプスのヒールの有無で比べると、ヒール有りパンプスを履く者が多かった。最もよく購入する

パンプスのヒールの高さは3㎝以上5㎝未満のものであり、7 ㎝以上ヒールがあるものをよく購入する者は少数であった。

４）現在の自分の足に何かしらの問題があると回答した者は約5割であり、日本人口の約50%に足病変を認めるという結果と比較すると今回の調査でも同様の結果が得られた。

５）アンケート項目に関して因子分析を行った結果、「パンプストラブル因子」「靴サイズ適合性重視度因子」「快適性重視度因子」「機能性否定ファッション観因子」の4因子を得ることができた。因子間相関分析から機能性否定ファッション観の強いものは、パンプスのサイズ適合性、快適性に課題があり、パンプス常用者においてはパンプストラブルにも見舞われやすくなることが危惧された。

６）因子得点とヒールの高さの重回帰分析の結果より、ファッション性を重視する者は、ヒールの高さと相関があることがわかった。ファッションにこだわりヒールを履くことによる問題を抱えていながらもそれを履き続けているということが考えられる。

７）パンプス着用に関して、歩きにくいと感じている者は6割以上おり、多少歩きにくいと感じていてもデザインが好みであれば約5割の者が履き続けてしまうという結果になった。また、3割以上の者が歩きにくいと感じていてもデザインが好みであればヒール高が高いヒールを履き続けるという結果を得た。

自分の足に合わない靴を履き続けると痛みの原因になりうるとともに、外反母趾を引き起こしてしまう可能性がある。しかしビジネスシーンなどでパンプスを履かざるを得ない場面も多々ある。このような中で、足に負担がかかりにくく最適なヒールの高さを明確にすることで今後のパンプス選びの参考資料としたい。

以上、本学においては現状では、パンプスを日常的に履くものは少数派であるが、ファッション関心度の高い者では、社会人になってからパンプスに関する足の疾患を生じる可能性が示唆され、正しい知識を持つ必要性が明らかとなった。

５．謝辞

アンケートの回答をしてくださった本学の学生の皆様に心より感謝いたします。

【引用・参考文献】

1) 朝日新聞デジタル, 「＃ＫｕＴｏｏ」どう考える？, https://www.asahi.com/opinion/forum/095/ 2019年, 2020年10月29日最終アクセス.
2) 熊田佳孝：エビデンスに基づくフットケアの実践、EB NURSING4（1）：5-7、2004
3) 米山美智代、八塚美樹、石田陽子、新免望、原元子、松井文：大学生の足や爪のトラブルとフットケアに関する実態調査．富山大学看護学会誌 6（2）：27-35、2007-03